

書評

ミクロの寄生、マクロの寄生

山岡和純

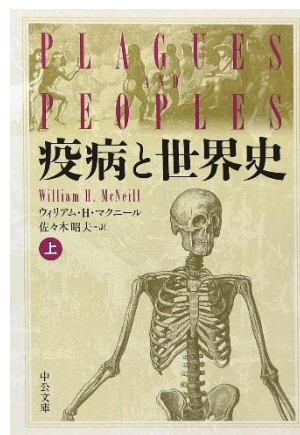
国立研究開発法人国際農林水産業研究センター企画連携部

東洋大学国際学部 講師

マクニール,ウィリアム・H、2007年、疫病と世界史（上・下）、中央公論新社、佐々木昭夫訳

Plagues and peoples / William H. McNeill, Garden City, N.Y. : Anchor Press , 1976

本書は45年前の1975年に書かれたもので、新潮社から1985年に出版された300頁超の邦訳単行本は古書市場で希少本として入手できる。もはや書物としては「古典」の部類に入るが、邦訳は1997年に原著者が書き下ろした「序」を新たに加え、2007年に文庫化（上下巻に分冊）され市販されている。本書をどこかで目にされた諸兄も多いに違いない。



原題は *Plagues and peoples* なので、「数々の疫病と人々」と訳されるべきところ「疫病と世界史」との邦題を与えられている。古典ゆえ、本書の書評も優れたものが数多く出回っている。Webサイトから入手できるものを以下に3点ほどご紹介する。

<https://blog.goo.ne.jp/toride727/e/49dcbe3ebad44b48b75646820d20295c>

https://www.teikokushoin.co.jp/journals/history_world/pdf/200401/history_world200401-01-04.pdf

<http://www.otsuma.ac.jp/news/2020/> 【学長通信】歴史から疫病を考える

原著者のウィリアム・ハーディー・マクニール（William Hardy McNeill、1917年10月31日生）は、カナダ出身の歴史家で、シカゴ大学の歴史学教授を長く務め、名誉教授となり、2006年に引退し2016年に98歳で生涯を閉じた。彼は、局所的な時代・地域に専門化していく当時の学会の傾向に反発し、『西洋の台頭（*The Rise of the West*）』を研究テーマとするなど、旧世界の文明の互いの影響、とりわけ16世紀以降に西洋文明が他の文明にもたらした劇的な影響という観点から世界史を探索した。

原著者がこの本を執筆した動機は序論に記されている。それはスペイン人のメキシコ征服に関し、わずか600人の部下を率いたコルテスが何故数百万人のアステカ帝国を征服できたか、しかもアステカ人が古来守り続けた神々と祭祀を捨てさせてキリスト教に改宗させ得たかについて、彼は1950年代半ば頃に強く疑問を抱き、その解答を求め続けて疫病に行き着いたのだという。コルテスと部下の兵士たちが1519年に渡来してから、アステカ帝国が存在した中央メキシコの人口は、1548年の603万人から1608年には107万人に激減したと推定された。これは馬と銃火器だけで成せる業ではなく、そ

の原因はスペイン人が持ち込んだ天然痘の蔓延であった。健康で頑健な青壮年の男女が持つ強壯な免疫システムが、これまで全く経験のないタイプの病原体の侵入に過度に反応し、全身に炎症と浮腫を起こして死に至る。本書にはそこまで明記はされていないが、これは免疫システムの暴走、自己免疫不全であり、近年その発症メカニズムが明らかになってきたサイトカインストームによる重症化が頻発したのではないかと想定される。

アステカ人に襲い掛かる致命的な悪疫がスペイン人には無害であることを目にしたとき、神はスペイン人の側にあると思わざるを得なかったろう。そして、アステカ人は古来の宗教も捨て、キリスト教を受け入れスペイン人の支配に服した。もし、この悪疫がなかったなら、勇猛なアステカ人は数千、数万の犠牲を出しつつも戦い続け、600人のスペイン人の軍門に下ることはなく、全く違う歴史が刻まれていたかもしれない。

これに類した疾病によるジェノサイドともいうべき事態が、アメリカ大陸のいたるところで起こったらしい。メキシコの後にはペルーのインカ帝国、カリブ海の西インド諸島など、コロンブス以降にヨーロッパがアメリカに持ち込んだ疫病は、天然痘のほかに麻疹（はしか）、チフス、インフルエンザ、ジフテリア、おたふく風邪、マラリア、黄熱病、百日咳などが挙げられる。あるいは、1918年1月から1920年12月までに世界中で5億人が感染し、数千万人の死者を数えたとされるスペイン風邪（インフルエンザの1918年パンデミック）は、第一次世界大戦の終結を早めた。疫病は、世界の歴史を動かす。

原著者は、人類が樹上生活から草原に降りて二足歩行を始めた400万年前の頃に、身体的弱点を補う道具を使いだし、食物連鎖体系から抜け出して生態系の攪乱者となったことで、疫病とヒトとの関りが変化すると指摘している。即ち、人の進化、例えば言葉の習得や行動範囲の拡大、生活様式の変化、そしてやがては移動手段の開発や社会システムの変化に伴い、それまで両者が共生し安定していた寄生者（病原体）と宿主（ヒト）の関係が、不安定な過渡期を経て再び安定化する、ということを繰り返しているのだ。感染症によっては、ペストの蚤と齧歯類とヒトのように宿主が複数の種に跨る場合もあるが、病原体とヒトとの関係で見たときに、寄生者があまりに攻撃的で宿主がどんどん死んでしまえば、寄生者にとっても得にはならない。生き残った宿主が寄生者を排除する力が強ければ、この寄生者は行き場を失い絶滅する。

結局、宿主との間で安定的な関係を築ける寄生者だけが長く生き残れるのだ。宿主の体内で増殖するが病原性がそれほど強くない寄生者だ。発病もしないのでヒトからヒトへの伝播力も発揮せずに両者の関係が安定していたものが、ヒトの移動によりその寄生者を受け入れたことのない遠方のコミュニティで爆発的に伝播することがあろう。安定していた生態系をヒトが攪乱する一環の出来事として、疫病の蔓延は突発するのだ。

上巻では有史以前から12世紀まで、下巻では13世紀から現代までの、こうした疫病と人々との関わりを延々と綴り、これまでは偶然の突発的な出来事として歴史学者に軽視され過小評価されていた疫病が、世界史を動かす重要なファクターであることを証明

しようとしている。そこに描かれているエピソードは、国力で勝るアテネがペロポネソス戦争で負けたこと、ローマ帝国でキリスト教が広まったこと、インドでカースト制度が続いたこと、トルコ帝国の拡大とペストの欧州への伝播、日露戦争で日本軍の予防接種が活躍したことなどで、歴史家らしい描写の前に読者は思わず頷いてしまうであろう。

さて、本書評の表題の「ミクロの寄生、マクロの寄生」とは、「歴史は持続可能な寄生により作られる」という、歴史家の原著者が看破した仮説である。つまり、この寄生者（病原体）と宿主（ヒト）の共生関係は、人類が道具を使い始め生態系を攪乱し始めた時より続く、寄生者（ヒト）と宿主（地球環境）との共生関係にも当てはまり、さらに、社会という器を作り出した中でのヒト同士の共生関係、即ち寄生者（領主）と宿主（農民）、あるいは寄生者（現代の経済的支配階層）と宿主（被支配階層）の関係にも当てはまるというものである。原著者は病原体とヒトとの関係をミクロの寄生、その他をマクロの寄生と名付けている。結局、生命体とは別の生命体や生態系に寄生して生き続け、勢力を拡大しようとするものであり、人間はその中でも同種の仲間にも組織的に寄生し、繁栄しようとする生き物なのだ。マクロの寄生においても、寄生者と宿主の関係は、両者の進化や変化に伴い、安定的な関係—不安定な過渡期—新たな安定的な関係を繰り返す、これが歴史を作るのだ。

2019 新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) を考えてみても、もし、今年の1月末の旧正月（春節）に、世界をまたにかけた中国人旅行者の大移動や帰省がなければ、欧米で大発生することなく、全世界にも広がらず、武漢市とその一円の風土病で済んだのかもしれない。ローカルマターであった人間と SARS-CoV-2 との安定的な関係が、中国人の経済発展、それを歓迎しカネを落とさせようとする観光業、経済を全てに優先させる現代人の価値観により破られ、不安定な過渡期に突入したのだ。それが世界規模で急速に進んだため、パンデミックと言われる事態になり、歴史に刻まれることになった。そもそも SARS-CoV-2 は蝙蝠が起源との説もあり、SARS-CoV-2 と蝙蝠との間でそれなりの安定的な関係が築かれていたものが、何らかの攪乱によって破られたことが発端なのかもしれない。そして今後、SARS-CoV-2 とヒトとの関係は、将来の新たな安定的な関係に落ち着くまで、感染拡大、重症化率の遡減、ウイルス RNA の変異と集団免疫獲得のせめぎ合い、という現在の不安定な過渡期の状況が続くのであろう。

疫病と人間の歴史は、終わりのない、しかし定常的ではなく、両者の進化や変化により安定的な関係—不安定な過渡期—新たな安定的な関係を繰り返す、共生関係の歴史なのだ。そしてそれは、寄生者であるヒトと宿主である生態系・地球環境、寄生者でも宿主でもあるヒト同士の共生関係でも同じ構図で綴られて行くのであろう。